



茅ヶ崎市立浜之郷小学校

校長 安倍 武雄

2026年10月1日

10月号

学校教育目標 ～支えあう・聴きあう・学びあう～

子どもたちが自分を再発見し、友だちを再発見し、学ぶことの価値と意味を再発見して「人生最高の6年間」を生み出す学校、そして、その営みを通して教師も親もともに育ちあう学びの共同体としての学校でありたい。

「がんばれ！」だけでは無責任

皆さんは福部真子選手をご存じでしょうか。9月27日のアジア大会で100mハードル決勝が行われ、12秒74で日本44年ぶりの金メダルを獲得した選手です（さらに中島ひとみ選手は12秒78で銀メダルに輝き、日本勢のワンツーフィニッシュ！）。私もよく知らない選手でしたが、福部選手に注目した訳は、彼女の座右の銘が「顔晴（がんば）る」だと知ったからです。テレビ中継でもそのうちわを持った応援団が映し出されていました。

「がんばれ」「がんばりましょう」など励ましとして当たり前に使っている言葉ですが、そもそも「我を張る」「眼を張る」が語源と言われています（当然諸説あり）。それが、次第に、「困難を乗り越える」「粘り強く精を出す」などが強調されて、以下のような説明に落ち着きます。

1. 困難にめげないで我慢してやり抜く。
2. 自分の考え・意志をどこまでも通そうとする。我(が)を張る。
3. ある場所を占めて動かないでいる。

（デジタル大辞泉「頑張る」より抜粋）

これらのどの説明も何か悲壮感ややらされ感を醸していないでしょうか。スポ根マンガのように、嫌なことも我慢して、自分を押し殺し、忍耐を重ね、ひたすら努力する姿が目が浮かびます。

それに対し、福部選手の「顔晴る」はどうでしょう。本人によればその意味は「顔が晴れるように頑張る」ことだそうです。誰かにやらされるのではなく自らの意思で練習に打ち込むイメージが膨らみます。さらに、やり切ったという達成感と共に輝く笑顔が浮かんできます。

何かを達成するために努力するのは他人ではなく自分自身です。だから、励ましの言葉は、課題解決に向けてのその子の行動を起こせるものでなければなりません。良かれと思ってただ「がんばれ」と声を上げるとき、子どもたちは「いまの努力では不十分」「成果が出ていない」…となじられていると受け取る可能性だってあります。それでは逆効果です。

ただ「がんばれ」だけではどうすれば問題を解決できるのか伝わりません。「〇〇を〇〇のように」という具体的なアドバイスが必要です。例を挙げれば、「漢字をがんばれ」では、子どもたちは何をどうすれば漢字をがんばったことになるのかが分からないということです。「へんにつくりに分けて覚えよう」「空に3回書いて、ノートに3回書こう」「目をつぶって書いてみてわからなかったらスキルを見てもう一回書くよ」のような声掛けが必要なのです。そうやって、自分の努力が力になる経験を積ませて、「できるってうれしいな」という達成感、つまり、子どもの「顔が晴れる」ことが大切なのです。

蛇足ですが、福部選手は菊池病を経験しています。菊池病は首のリンパ節が腫れて発熱と激痛が伴う原因不明の病です。それを押して練習を繰り返し、アジアの大舞台に這い上がってきました。舌の根も乾かぬ内に「オリンピックまで、がんばれ」と思ってしまいます。

今年も「校長とお話会」開催します。下のQRコードよりどうぞお気軽にお申し込みください。当初8日とご案内していましたが変更になりました。皆様のお越しをお待ちしています。

日時 10月20日（火）
13:15～14:45
場所 1年生ラーニングルーム
持ち物 うわばき、のみもの、筆記用具

